

<研究論文>

博物館の実物資料のもつ教育効果 —「生涯学習概論」における唐澤博物館との連携—

土井 進*

1. 目的

本研究は、『教育博物館』として結実した唐澤富太郎の教育学研究の真髄、を解明する研究の一環として取り組むものである¹。筆者は唐澤の教育学研究の歩みを①ドイツ教育哲学の研究（ナトルプ）、②仏教教育思想の研究（親鸞・道元・日蓮、法華経）、③日本教育史の研究（教科書の歴史、教師の歴史、学生の歴史）、④世界の教科書研究（世界の道徳教育、世界の理想的人間像、教科書と国際理解）、⑤図説日本教育史の研究（図説近代百年の教育、図説明治百年の児童史）の5期に区分して捉えている。そして、これらの研究成果を総動員することによって畢生の大業『教育博物館』が完成し、唐澤の教育学研究の頂点を形成するに至ったと考えている。

本稿は、「生涯学習概論」の受講学生が唐澤博物館²を初訪問し、そこで実物資料と初対面することによって、一体何を学んだのか。学生たちが自分の目と「こころ」で実物資料から何を看取したのか、いわば実物資料のもつ教育効果がどのようなものであったのか、を明らかにすることを本研究の目的としている。

本稿において唐澤博物館とは、平成5（1993）年に一般公開されてからの呼称であり、それ以前は教育博物館³と称している。また、著書として公刊されたものは『教育博物館』と表記する。一般公開される以前の教育博物館は、唐澤個人の研究室、応接室、そして教育研究資料の収蔵庫であった。唐澤が数万点に及ぶ実物資料を収集・活用して公刊した研究成果は、『図説近代百年の教育』（1967）国土社、『図説明治百年の教育』上下、（1968）講談社、『教育博物館』上中下解説、（1977）ぎょうせい、『図説教育人物事典』上中下、（1984）ぎょうせいであった。これら的大著を世に出したあと絶筆となったのが『学校週五日制時代の女性教師—成瀬仁蔵の教育理念に学ぶ—』（1997）、東京法令であった。

2. 「生涯学習概論」における唐澤博物館との連携

2-1. 唐澤富太郎に師事し『教育博物館』の完成を見る

大学2年生であった昭和44（1969）年12月に、筆者は初めて教育博物館を訪問した。それ以来10年以上にわたって唐澤に師事し、資料収集、運搬、修理、整理、解説文の下書き、掃除などの研究活動に従事した。そして、『教育博物館』（上中下解説）を刊行するために、4年間にわたって実物資料を美術梱包して撮影所に運び、撮影が終わったら物品台帳

*淑徳大学人文学部歴史学科

にチェックして元の場所に収納するという作業を手伝い、約 7,000 枚の写真が撮影された。

昭和 43(1968)年に建築された鉄骨 3 階建ての教育博物館は、唐澤が実物資料の宝に囲まれて、人間形成と「もの」の関わりを究明する研究室であった。筆者は師に随順し『教育博物館』の出版元が決まるや、さっそく唐澤と東見本を真ん中において坐り、実物名を書いた紙片を貼っていく割り付け作業を開始した。次いで写真撮影を行い、さらに約 4,000 枚の解説原稿を大車輪で書き上げ、上中下巻と解説、並びに尾形月耕の『寺子屋風景』、明治 6 (1873) 年文部省発行『第二博物図』、同じく明治 6 (1873) 年文部省発行『家庭教育用錦絵』の復刻掛軸 3 本を付録とした 10 万円の大著が世に出されるに至った。ここまでちょうど十年の歳月が流れた。唐澤の持論は、一つの仕事が出来上がるまでには 10 年かかるであったが、まさにその通りであった。筆者は 10 年の歳月を教育博物館に通い、教育学研究に取り組む師の激しい執念、どっかと坐って原稿に立ち向かう気迫に接しながら、研究者の仕事の厳しさを日々心に刻んだ。

2-2. 教育博物館の実物資料を活用した中学校社会科の公開授業

教育博物館に通い詰めたことによって身に付けた最も大きな力は、博学な師のもとで歴大な数の実物資料を扱うことによって、本物を見る眼が養われたことである。また、中学校社会科教師として授業づくりに悪戦苦闘している筆者に、教育学・歴史学の専門性に裏付けられた深遠で明快な研究指導により、大きな自信と勇気を与えていただいたことである。

教育博物館の実物資料を活用して公開授業を実践する機会を与えられたとき、生徒が驚くばかりの教育効果を発揮してくれたことは大きな喜びであった。昭和 55 (1980) 年 10 月 31 日 (金) 第 4 校時に第 13 回全国中学校社会科教育研究大会、東京大会が東京都文京区立第五中学校 (現・音羽中学校) で行われた。筆者は、単元名「文明開化と殖産興業」において、本時の主題を「文明開化の世相—教育による近代化への努力—」と設定した公開授業をするために唐澤に相談し、教育博物館から実物資料『文部省編纂 明治 6 年 5 月 師範学校彫刻 小學讀本卷一』『明治 8 年 1 月 小學入門 乙號 文部省』『世界国尽 福沢諭吉訳 明治 2 年』『掛図 第二博物図 文部省 明治 6 年』『東海道往来』『論語集注』『大學章句』を借りることができた。この師の温かい理解と激励のおかげで東京都を代表して授業ができたことに深く感謝している。全国の教員で満員となった体育館で自信をもって授業に臨むことができた。

上記の実物資料を江戸時代と明治時代に分類し、生徒に比較・考察させ、そこから文明開化の世相を把握させようと意図した授業において、生徒が驚くほど深い理解を示した。これは実物資料を生徒に提示することができたからこそその教育効果であったと考える。生徒が発揮した教育効果とは次のような学びであった。

「ぼくは文明開化というところは特に興味もないし、できる所でもない。けれども授業のはじめに配られた資料をみて、明治になってこんなに変わったのかということと、すぐれた印刷術をみてだいぶ外国の技術を取り入れているとすぐにわかった。『東海道往来』という江戸時代の教科書をみて、これが本当に教科書なのかと思ったが、読み書きには適していると思う。次に明治時代の教科書『小学読本』『小学入門』『世界国尽』などをみると、西洋風の絵・世界地図・英語の教科書『ウイルソンリーダー』の直訳などが書き記されていて、あらゆる面で日本人の知識を高めようとしていることがわかった。そして、内容もかなり高度なものであった。明治の文明開化の風潮は人々の知識も高めないと国も豊かに富んでいかないという考えにもとづいている。そういう点で、明治初期の教科書を文明開化と呼んでさしつかえないのではないと思う」⁴。

2-3. 「生涯学習概論」における唐澤博物館との連携

筆者は平成 26 (2014) 年度から淑徳大学人文学部の教職課程担当教員として東京キャンパスに勤務している。合わせて学芸員養成課程の必修科目「生涯学習概論」も担当することになり、ここに 23 年振りに唐澤博物館との連携が復活した。「生涯学習概論」が学芸員養成のための科目であることから、筆者が生涯学習について経験してきた東京都文京区教育委員会での社会教育主事補の仕事や、長野県生涯学習審議会会長としての仕事を取り上げるよりは、教育博物館での仕事を通して学んだことをシラバスの中心に位置づけるのが良いと判断した。受講学生が唐澤博物館の実物資料の中から、最も関心をもったものを一つ選び、その実物を探究課題として設定し、調べ学習を経て A 4 判 2 枚のレポートに仕上げ、口頭発表するというアクティブ・ラーニングの学習方法を用いた。

唐澤博物館と連携した課題探究型のアクティブ・ラーニング⁵は平成 27 年度から実施しているが、本研究では平成 29 (2017) 年度に歴史学科 1 年生 31 名が、同年 11 月 24 日 (金) に唐澤博物館を訪問し、「日本の児童文化」「日本の学校文化」「日本の生活文化」に関わる実物資料に出会って考察したレポートを研究資料とした。

唐澤博物館の実物資料に基づく課題探究型学習 (アクティブ・ラーニング) において、歴史学科 1 年生が着目した実物資料は表 1 の通りである。「日本の児童文化」「日本の学校文化」「日本の生活文化」の 3 分野の間に偏りはなく、興味関心の所在に広がりがあることが伺われる。また、毎年必ず取り上げられているという実物資料も無く、学生一人一人が主体的・能動的な探究心を発揮して、最も知りたい実物資料を探究課題として設定していることが分かる。

表1 学生が着目した実物資料

	平成 27 年度 (22 名)	平成 28 年度 (21 名)	平成 29 年度 (31 名)
日本の児童文化	桃太郎・金太郎・牛若丸 男児の遊戯 子どもの遊びと遊具 双六 玩具 かるた 羽子板と凧あげ	さるかに合戦 独楽 国策紙芝居 お菓子 少年倶楽部・少女倶楽部 かるたとカルタ 面子	ガラス絵 コリントゲーム パズル ブリキ製玩具 市松人形 戦前の児童向け商品 凧
日本の学校文化	桃太郎の原典と絵本 教科書に載っている「さるかに合戦」 桃太郎 寺子屋の備品 明治時代前期の小学校 日本の英語学習史 寺子屋の書道	音楽教育の歴史 幕末・明治初期の外国語学習と世界認識 世界国尽と小学読本 教材としての童話 寺子屋 富国強兵のための国民教育 幕末維新期の英語学習と世界認識 棍棒体操 そろばん	そろばん (3名) 近代日本の世界をみる目御真影 紙腔琴 寺子屋 (2名) 天神様 (2名) 教育勅語 薙刀 筆箱 墨塗り教科書 (3名) 教科書
日本の生活文化	麒麟・龍・鳳凰・鶴と亀 江戸時代の女性用具 幕末期の風刺画 おみくじとうらない 絵馬の起源 小倉百人一首 旅の目的と「バーチャルな旅」と「リアルな旅」 江戸時代の菓子づくり 医学を支えた道具	農耕用具 あかり 家紋と人びとの誇り 龍・狛犬 女性用具 一和鏡・櫛・簪— 東海道 日本古地図	オルゴール時計とランプ 女性髪飾り—丈長・元結・簪— 盤双六 明治時代の時計 薬研 裁縫道具 旅道具

2-4. 実物資料の選定に影響を及ぼしている子ども時代の遊び・学びの体験

唐澤博物館は1階が日本の学校文化、2階が日本の子ども文化、そして3階が日本の生活文化の展示となっている。ここに展示されている7,000点もの実物資料の中から、学生が探究課題として選んだ1つの実物資料と、彼らの子ども時代の遊びや学びの体験が深くつながっていることを伺わせる事例がある。例えば、「私はそろばんに興味を持った。なぜなら、私が小学生の6年間、近所の珠算学院でそろばんの習い事をしてきたからだ。」

「私は高校生のときに簿記という授業の際、そろばんを使っていたこともあり、自分にとっては馴染みのものであった。」また、ある学生は「ブリキ製玩具を選んだ。幼少期に祖父の家へ行く時によくブリキ製の玩具で遊んでいたため、一目見た時にどこか懐かしい気持ちになったからである。」と。この学生にとって、ブリキ製玩具の実物資料にふれたことが、幼少時の祖父の家でのブリキ製おもちゃでの遊びとつながって、脳裏に浮かんできたのであろうか。

また、ある学生は「昔から童話が好きだったので、『教育博物館』上・中・下を読んで童話に関わるものを調べたいと思った。そして実際に唐澤博物館に行き、童話や物語を小さなガラスに映しているガラス絵の実物資料を見て感動し、これを探究課題として設定しようと思った。なぜならガラス絵は西洋から取り入れた文化であり、それをうけて日本の子どもたちのための童話をガラス絵に描いたものを調べることによって、当時の日本人の西洋やその文化に対する学び方を知ることができると思ったからだ。また、童話だけでなくガラス絵には戦争を描いたものや歴史や様々な教訓を描いたものもある。この教科書とオモチャの中間地点ともいえるガラス絵を調べることで、楽しく学ぶということについても考えられる」との思いを馳せたという。この学生にとって幼少時に愛好した童話と実物資料のガラス絵に描かれた童話が結び付き、これを糸口にして西洋文化の導入についても探究を深めようとしている。

さらに薙刀に最も興味を持ったという学生は、「高校生のとき薙刀部に所属していながら、競技での薙刀の姿しか知らず、日常でどう使われていたのかなど薙刀に関してあまり詳しくなかった。そこで私は薙刀が戦前・戦時中・戦後にどのような役割を担っていたのか、を明らかにすることを探究課題とした。」と述べている。

また、女性の髪飾りに興味をもった学生は、「幼少期より、神秘的であり、どこか魅かれる巫女に興味があった。巫女は、白い紙のようなもので髪を束ねており、それが丈長であると知った。唐澤博物館には、丈長、さらに「髪」に関係する元結、簪が展示されていた。今回は、丈長だけではなく、女性の髪飾りに関係するものを考察しようと考えた。」と述べている。

さらに、趣味で裁縫をしているので裁縫道具を選んだという学生は、「昔の裁縫道具は今

とどういった違いがあるのか興味を持った。現代の裁縫道具と昔の裁縫道具を比較し、その共通点や相違点を考えた上で、昔の人々の生活と裁縫のつながりを考察したい。また、近代日本の人々の意識の中で、女性にとって裁縫がどのような立ち位置であったかを調べ、近代日本の女性についての理解を深める。」ことを課題としている。

このように実物資料を選定し、課題意識を明確化する過程において、学生は様々に思いを巡らしながら、自分の幼少期の遊び体験や学校での学び体験と結び付けることによって、経験の再構成を図ろうとしていることが伺われる。

3. 学生の清新な眼に映った唐澤博物館の第一印象

現代の学生が看取した唐澤博物館の第一印象はどのようなものであったか、を次に見ることにしたい。平成 29(2017)年 11 月 24 日(金) 13 時に西武池袋線桜台駅で 31 名が待ち合わせをし、学割の入館料 500 円を集金したあと、徒歩 15 分ほどで唐澤博物館に着いた。館内には 31 名が一堂に会せる場がないので、館長さんに挨拶したあとは一切の解説をしないで直ぐに、1 階から見学する班、2 階からの班、3 階からの班の 3 グループに分かれて実物資料との対面が始まった。学生が看取した唐澤博物館の第一印象には次のようなものがあった。

(1) 一人の人物による厩大な収集に「驚愕」

「私の唐澤博物館の第一印象は、『レトロな雰囲気』である。訪問する前は、誰もが想像するような博物館だと思っていたが、実際は住宅街にあり、建物が古めかしかつたため、非常に驚いた。しかし、建物内は綺麗であり、最初に述べた『レトロな雰囲気』もあった。また、展示物が所狭しと置いてあり、唐澤富太郎が一人でこれらを収集したのだと思うと、『驚愕』の一言に尽きると感じた」。

(2) 館長室には仏像・本がびっしり

「学び、遊び、暮らしの視点から、子どもの生活史をたどることができる。そして、唐澤富太郎が日本全国をまわって収集してきた展示品のひとつひとつに、使っていた人たちの気持ちが込められているようであった。普通に見ると外観は民家と間違えそうだが、中に入ってみると 1 階にはオルガンや教育勅語に関する展示、2 階に行くと人形・硯などの展示、3 階には唐澤が書いた本、館長室、実際に遊べるコリントゲームなどがあった。私が驚いたことは、館長室には仏像・本がびっしりあったことと、美術館や歴史博物館では一部の展示をするのに対し、多くの資料が展示されていることで違いがわかりやすいこと、実物を直視することで細部まで観察できたことである」。

(3) なぜ教育博物館が有名でないのか

「最初に外観を見たときは雰囲気のある建物だとは思ったが、ここに本当に教育の歴史を持つものがあるのかは少し疑問だった。しかし、中に入ってみると所狭しと日本の教育

や生活に関わるものが飾られており、目を奪われた。大きなものから細かいものまで数多くある展示品を見て、本当にこれを一人で集めたのかと驚いた。唐澤富太郎の教育に対する情熱が伝わってくるようであった。と同時に、なぜここが有名でないのかとても気になった。歴史的に興味深いものもあれば単純に綺麗で目を奪われるものもあった。教育に関わる人だけでなくもっと多くの人に見てほしい博物館である」。

4. 実物資料が語る唐澤富太郎の人間像

唐澤博物館とは何か、と問われれば唐澤富太郎という人物が生涯をかけて収集した「子ども・学び・暮らし」に関する博物館である、といえよう。では、膨大な実物資料にふれた人に唐澤富太郎とはどのような人物であったと思うか、と問えば様々な人物像が描かれてくることと思われる。学生たちはたくさんの実物資料にふれて、唐澤富太郎をどのような人物として捉えたのであろうか。このことについて次にみていきたい。

(1) 唐澤は実物資料を間近で感じさせ歴史と一体化させようとした

「唐澤富太郎は、来館した人々に実物資料を間近で感じさせ、より歴史と一体化できるようにしたかったのだと思う。今現在、各地の博物館は、国宝など珍しいものしか展示しておらず、学びにはあまり向かないものだ。しかし、唐澤の教育博物館は、その時代に生きていた人々の活動そのものが展示してある。活動そのものを展示することで、歴史を深く知ることができる。また、その時代の教育を知ること、教育の大切さを後世に伝えたいという思いがあったと感じた」。

(2) 唐澤は一人の教育者として日本の教育文化を後世に伝えようとした

「唐澤は教育者として、これからの日本を担っていく子どもたちに、学ぶことの大切さ、遊ぶことの大切さを後世に残し伝えるために建設したのではないかと考える。私は、唐澤富太郎が一人の教育者として、未来の教育のために、何ができ何をすればいいのか考えたときに、教育博物館という学舎を建設しようと考えたのではないかと感じている。また、当時のものを当時のまま保管することによって、より多くの子どもたちや他の教育者たちに、日本の文化を伝え、その文化を後世に語り継いで欲しいという思いがあったのではないかと考える」。

(3) 唐澤は実物教育の重要性を信念としていた

「唐澤富太郎がこの教育博物館を建設したのは『百聞は一見に如かず』ということにまとめられると考える。博物館には7,000点あまりの収集物があり、当時の子どもたちの遊びや学びが一目でわかるようになっている。これは教育を学ぶ学生・教師のために教科書を読むことや、講義を受けるだけではわからないことを実物資料に触れることで、理解してもらおう実物教育が重要だということではないだろうか」。

(4) 唐澤は価値があると考えたものを「ただのモノ」とはしなかった

「唐澤富太郎が教育博物館を建設したのは、歴史的に価値のあるものを『ただのモノ』とせず、次の世代の人たちに伝えることで、貴重な展示物、収蔵物の本当の意味を示すことを使命としたからではないかと感じた。また、教育者としての生涯学習の理念を機軸とし、老若男女、年齢性別に関係なく伝えることで、実物資料でしか伝わらない日本の姿、伝承文化を後世に残していきたい、と強く願ったからではないかと感じた」。

（５）唐澤は博物館を生涯学習の場と考えた

「唐澤博物館には一見教育に関係のなさそうな展示品もある。学校や寺子屋に関するものや子どもの遊びに関するものならまだしも、旅の道具が唐澤博物館においてあるのはいささか疑問に思う人もいるかもしれない。しかし、私はそこに生涯学習の意義があると考ええる。生涯学習とは単なる勉強ではなく、何に対しても興味を持つことである、ということが唐澤博物館で伝えたいことなのではないだろうか。興味を持ち、知りたいと思うことが大切であるのだ」。

（６）唐澤は実物資料の持ち主やその祖先への敬意の念を忘れない信仰者であった

「唐澤富太郎にとって、教育や学習というものは、「なくてはならない必要不可欠なもの」ということを良く理解していたからこそ、教育博物館の建設を生涯の課題としたのだと私は思った。教育に関する資料を集め、展示することで後の世代の人びとに教育の大切さ、学ぶことの大切さを知ってもらふ目的があったのではないかと私は思う。唐澤は、北海道から沖縄までの各地をまわり、心血を注ぎ、多くの人びとの協力を得て、膨大な量の資料を集めたようだ。博物館の入り口にある『開館にあたって』に書いてある言葉で『これらの生資料を長年手元に置いて研究していると、私たちの祖先の「知恵」と「こころ」が凝縮されているのを痛感します』とあることから、唐澤が、これらの実物資料の持ち主やその祖先に対して敬意をもち、研究をしていたことがわかった」。

（７）唐澤はただの道具・玩具の中に日本の文化を語る大事なものを発見していた

「(唐澤富太郎が博物館を建設したことについて) 一見、ただの昔の道具・玩具にしか見えないものが実は、昔の日本の文化を語るうえで大事なものだ」と、唐澤富太郎は把握していた。そして、未来の子どもたちにこれからの日本を担ってもらふため、教育という視点から何か貢献できることはないかと探した結果が、この博物館の建設だと私は考える」。

（８）唐澤は教育資料を遺すことへの周囲の無理解を気にせず、知己を百年後に待っていた

「唐澤富太郎が博物館を作った理由は、自国の教育やその移り変わり、歴史などを次世代に残すことの重要性を日本は理解していなかったからだ」と私は思う。その重要性を次世代に伝えるために、日本中から資料を集めて、来館者に日本の教育について考えさせること。それこそ、唐澤富太郎が伝えたいことなのではないだろうか」。

（９）唐澤は博物館の実物資料が学びのきっかけになることを信じていた

「博物館を訪れた人たちは、様々なことを実物資料からよみ取る。そして、たくさんある実物資料の中から自分が興味のある物を見つけ出すこともある。さらに、その実物資料の存在意義や時代背景について調べることで、今回のレポートのように、生涯学習へとつながっていく。唐澤富太郎は、博物館が学びのきっかけを与える場所だと思ってこの博物館を建てたのではないだろうか」。

(10) 唐澤は廃棄されてしまう運命にあった実物資料を後世に遺すことに使命を感じていた

「一生を賭けて悔いのない生涯学習の課題として、単なる「読み・書き」だけでは学べない実物資料による学習の重要性、を唐澤富太郎は大事にし、信念としていた。この信念に忠実に生きることが、唐澤にとって何よりの喜びであったので、廃棄されてしまう運命にあった教育資料を後世に残すため、日本中を捜し歩き、出会った資料を宝として集め、保存するために、この博物館を建設したと考えた」。

5. 実物資料のもつ教育効果

実物に接する意義について、鷹野光行(1984)は「博物館には資料としてさまざまな『本物・実物』が収蔵されており、これを見ることによって諸々の事象の迅速な理解が得られ、正しい情報も得られる」と指摘している⁶。鷹野が指摘する「諸々の事象の迅速な理解」について、別の表現で唐澤富太郎(1968)は「実物の持つ迫力は、換言すれば、実物のもつ統一性、全体性、具体性ということに外ならない。つまり抽象的に印刷された文献資料の場合よりもその具体性において、また、その時代や社会との活きた関連を如実に示すというその全体性において、さらに資料が部分的にはなく、一個のものとして有機的な統一性をもつということにおいて優れているということがいえるのである」と述べている⁷。

唐澤博物館の実物資料をみた学生たちは、果たして事象の迅速な理解を得ることにおいて、また実物資料のもつ統一性、全体性、具体性などを把握し、自らの探究課題についての教育効果を得ることができたのであろうか。これらの教育効果が確かに得られていると思われる事例を次に取り上げることにしたい。

(1) 「世界大地図」・「世界国尽」の実物資料から把握した近代日本の全体性

「私は実物資料『世界大地図』・『世界国尽』は、近代日本が世界をみていたことの現れであり、世界を知ることによって国際社会の仲間入りをする目的であったことがわかった。近代日本は、世界からみたら未熟な存在であり、日本自身もそれを自覚していた。それがわかるのが、福沢諭吉の『世界国尽』(明治2年)である。また、未熟な存在から世界を知るようになり、国際社会を学び、世界との関わりをもつようになった。これは、昭和19年に作られた『世界大地図』からみてわかることだ。これらから分かることは、これからの社会は、国際社会との関わりが欠かせないということである。国際社会で日本の地位を確立さ

せることが、今後重要な目的であり、そのためには、国民それぞれが国際情勢に目を向けなくてはならないのである。私が実物資料で得たものは大きく、また、今後活かすことができるものまで与えてくれる。一般的にみれば、実物資料は過去の遺物でしかないように思われるが、実物資料は今生きている人々よりも歴史を知っている知識の塊のようなものである。そんな貴重なものを活かすことができるのは博物館だからである。今後、生きていく人々に実物資料の価値を継承することで、実物資料の価値が発揮されると思う」。

（２）ガラス絵の実物資料から日本文化と西洋文化の融合についての迅速な理解

「幻灯機という目新しいもので、子どもが楽しく学べることは学習の際に必ず必要なこととなると私は考える。おもちゃ屋に並ぶそれらは子どもにとってとても魅力的なものに映ただろう。実際描かれている内容は教科書と同じようなものなのに、子どもたちはきっと自主的にガラス絵を欲しがったはずだ。幼いうちに楽しく学んだことは、大人になっても楽しく思えるものだ。ガラス絵が、生涯学習の第一歩となった人もいるだろう。また、ガラス絵というものは元々西洋の文化である。当時の日本人が異文化を受け入れそれを日本の文化と合わせるといことはあまり簡単なことではない。まず、外国の文化を自分たちと違うからと拒むのではなく興味を持って受け入れるところから始まる。それは、学習という言葉とはとても遠く感じられるが、成長するために必ず必要なことなのではないだろうか。学びとは、自身の知識を超えたものを拒まず受け入れることから始まるのだ。教育と遊びは対立関係にはない。このおもちゃのようなガラス絵は見た目以上に教育的な価値があると私は思う」。

（３）実物資料には思い入れや愛着があり物には心があると観る有機的な統一性

「私は、実物資料がもつ教育効果とは思い入れだと考える。ものを使えば使うほどそのものに思い入れや愛着、思い出が宿るように感じる。ものを使った思い出が使用者の人間を形作るのではないか。そのものを使ってない人でも年季の入った実物資料に触れることで何か伝わることを考えると考える」。

（４）『のらくろ』の実物資料を通して具体的に把握した戦前～戦後の社会の変化

「私は、『のらくろ』の関連品から、時代の移り変わりについて、より理解を深めることができた。連載開始当時は軍人が登場し、登場人物は軍隊に所属していたが、終戦後には軍隊は解散していることから、平和を願う時代に変遷し、子どもたちに軍隊や戦争というものをごこれ以上見せたくなかったのだらうと思った。また、1941年に、やむなく打ち切りになり、戦後連載を再開したことから、漫画を連載することが許されるほど、社会が柔軟になったことが伝わってきた。戦争の知識は、私たちが持つておかなければならないものである。戦前・戦中・戦後について様々なことを教えてくれることが、この実物資料のもつ教育効果だと思った」。

（５）「墨塗り教科書」の実物資料から把握した戦争の具体性

「私は、『墨塗り教科書』は、戦時中の日本の教育が間違っていたことを、戦後の大人たちが理解し、子どもたちに明るい未来を過ごしてもらうために、戦後に行った政策の1つであると考え。教科書から、戦意高揚などの記載を、墨を塗って消したことは、子どもたちに戦争を二度としないようにと願う大人たちの強い思いが感じられる。

一方で、戦時中の教育と何もかも変わってしまった授業に、子どもたちは、戸惑ったのではないかと考える。子どもたちは、何も悪くないのに大人の理不尽な方針に振り回された結果、教科書に墨を塗らなければならなくなったのではないかと感じた。

『墨塗り教科書』があることにより、後世に戦前と戦後の教育方針の変化、当時の子どもたちが国の方針に巻き込まれていたことを記録として残すことができたのではないか。そのことは、戦争というものに対する知識や、現在の日本教育の方針について考えさせるための教材となったのではないかと私は考える」。

これらの学生の記述からは、実物資料にふれたからこそ看取することができた日本文化が西欧文化を摂取して発展したことへの迅速な理解や、実物資料から伝わる統一性、全体性、具体性を通して、戦前の教育思想が否定され、新たな教育が始まったことを直観的に把握しているようすが如実に見て取れるのである。また、「もの」を単なる「もの」として見るだけでなく、「もの」には思い入れや愛情が込められているという、「もの」と「こころ」の関係にまで思いを巡らせていることがうかがわれる。

6. 結論

以上、「生涯学習概論」を履修した31名の大学1年生が、唐澤博物館を訪ねて実物資料にふれたことによって、次のような教育効果があったことが明瞭になった。

- ①実物資料を選定し、課題意識を明確化する過程において、学生は様々に思いを巡らしながら、自分の幼少期の遊び体験や学校での学び体験を想起し、経験の再構成を図っている。
- ②なぜ教育博物館は、遊びや学び、暮らしに関わる日本一のコレクションを誇りながら、有名でないのか、という疑問を呈している。
- ③唐澤の人間像は、収集した実物資料の持ち主やその祖先への敬意の念をはらう敬虔な信仰者であり、教育者であった、という共感的理解を得ている。
- ④学生は実物資料とじっくり向かい合うことによって、諸々の事象の本質についての迅速な理解を得たり、実物資料が語る統一性、全体性、具体性を若い感性でしっかりと把握していることが明らかになった。

これらのことから唐澤博物館の実物資料のもつ教育効果は明瞭であり、学生は十分な学修成果をおさめたと考えられる。博物館学が専門の鷹野光行は、博物館とは何か。それは只一つ教育の場であると主張し、イギリス文化遺産省の1997年の報告書を引用して、「博物館は教育をその存在の基盤とし、教育があらゆる活動の本質となる」と述べている⁸。唐澤富太郎(1977)は、「資料を多く集めてわかることは、『もの』には『こころ』があるということである。そしてこれらの『もの』こそ日本人を形成する主動勢力であったと思わずにはいられないのである」という確信を述べ⁹、「人間形成における『もの』と『こころ』すなわち日本人の精神的側面と物質的側面、この両者の融合した姿を『もの』を通して表現すること」¹⁰を『教育博物館』の最大の課題としたと述べている。また、唐澤は実物資料と知識の関係について、「私の年来の主張は、真の知識というものは、単に抽象的観念的に獲得されたものではなく、実物に直接膚でふれてみて体得したものでなければならないということである」と述べている¹¹。

7. 今後の課題

唐澤富太郎の教育博物館は、生涯にわたる教育学研究の集大成として結実したものである。その教育博物館構想の根源にあるのが「仏教と教育」の探究であり、「もの」と「こころ」の探究であると考えられる。この難問に挑むことがこれからの課題である。

¹唐澤富太郎の教育学研究の歩みについて、筆者がこれまでにまとめた論文は次の2編である。土井進(2017)「唐澤富太郎、畢生の大業『教育博物館』の原点—幼少年期の出雲崎での人間形成—」『淑徳大学人文学部研究論集』第2号、pp. 1-14、土井進(2018)「唐澤富太郎の『仏教と教育』を結ぶ『教育の宗教的基礎』の研究—東京文科大学教育学研究科・奈良女子高等師範学校時代の仏教教育研究—」『淑徳大学人文学部研究論集』第3号、pp. 1-14。

²唐澤博物館は平成5(1993)年に一般公開された。建物は東京都練馬区豊玉北の唐澤宅に隣接し、昭和43(1968)年に建てられたに鉄骨3階建ての教育博物館を改装したものである。内部を展覧用にガラスのショーケースに大改装し、展示物も約7,000点に精選した。たくさんの実物資料を所狭しと重ねて展示する方式を取り、見学者と実物資料との距離が近いことが特色となっている。所々に実物資料のキャプションが置かれているだけで、実物資料一つ一つについての解説文はない。その理由は、「読者の眼前に日本の伝承的事物を展示することによって、そこに秘められている伝統的な思惟、思考、思想を読者自身の目と『こころ』で看取し、そこから『視想』ともいうべきものを把握されることを願ってやまないのである」(唐澤富太郎(1977)『教育博物館 解説』ぎょうせい、p. 3)。唐澤は参観者が自らの眼で、実物資料そのものと対峙することによって、資料から伝わって来るものを感得することを期待したのである。

³唐澤富太郎(1911-2004年)は、昭和37(1962)年に欧米16か国を研究旅行し、ボストン美術館で日本美術の優秀性を再発見したことに自信を得て、高度経済成長のもとで廃棄寸前の運命にあった「子ども・学び・暮らし」に関わる実物資料を収集・保存することを

使命と感じ全国を行脚した。田中芳男(1838-1916年)・手島精一(1849-1918年)・棚橋源太郎(1869-1961年)等が取り組んだ教育博物館は、いずれも文部省の国家的事業として推進されたものであったが、唐澤が構想した教育博物館は、私財を投げ打って、日本の教育文化の実物資料を後世に遺そうとしたものであった。唐澤は教育とは人間形成であるという教育観のもとに、収集した実物を「日本の児童文化」「日本の学校文化」「日本の生活文化」の3つの分野に位置づけて分類し、日本人の形成を実物によって究明する体系を樹立したといえよう。

棚橋源太郎等によって発展した東京教育博物館は大正12(1923)年の関東大震災によって焼失し、その後、内容を純然たる科学博物館に変更し、今日の東京国立博物館となっている。

⁴土井進(1985)「都市学校の授業風景」伊津野朋弘・陣内靖彦・葉養正明編『都市社会の教育像』エイデル研究所、p.143。

⁵土井進(2015)「唐澤博物館と連携した日本教育史の課題探究型学習」土井進編著『平成27年度淑徳大学アクティブ・ラーニング報告書』淑徳大学人文学部、pp.32-58。

⁶鷹野光行(1984)「博物館の現状をめぐって」『地理』第29巻、第10号、p.11。

⁷唐澤富太郎(1968)「児童史研究の課題—実物を通しての開拓的教育史の研究—」『図説明治百年の児童史』上、講談社、p.76。

⁸ジョージ・E・ハイン著、鷹野光行監訳(2010)『博物館で学ぶ』同成社、p.4。

⁹唐澤富太郎(1977)前掲、p.5。

¹⁰同上。

¹¹同上、p.4。